

PRESS RELEASE

【報道関係各位】

15th  
Anniversary

山王美術館  
コレクションでつづる

# 印象派展

Impressionist Masterpieces from Sanno Art Museum

2024.3.1fri ▶ 7.29mon

コロー、ミレー、クールベ、  
モネ、ルノワール、ドガ、シスレー

山王美術館  
SANNO ART MUSEUM



## 開催趣旨

山王美術館は、2024年8月に開館15周年を迎えます。

15周年を記念して「山王美術館コレクションでつづる 印象派展」を開催いたします。

19世紀末のパリは産業革命を背景に急速に近代都市へと発展を遂げます。一方、絵画界においては、神話や聖書を題材とする「歴史画」を優位とし、伝統的な技法を遵守するアカデミスム絵画がいまだ主流であり、サロンへの入選が唯一作品発表の場でした。

こうした時代に現れたのがのちに「印象派」と称される画家のグループです。モネ、ルノワールらを中心とする画家たちは、クールベやマネによる写実主義を継承しながらも、アカデミックな価値観にとらわれない、新たな絵画表現をめざしました。光のもとで制作することを重視した彼らは、絵具を混色せずに並置する「筆触分割」という新たな技法を生み出します。印象派の画家たちは、明るさを失うことなく戸外の光を表現することを可能としたこの技法を用い、自らが生きる同時代の風俗を主題とすることで、ルネサンス以来の西洋絵画における色彩の観念を根底から覆す革新的な絵画を発表したのです。1874年には、画家たちだけの手によるグループ展を開催しますが、「印象派」の名称は、この第一回展に出品されたモネ作《印象、日の出》に由来します。最後となった第八回の印象派展(1886年)には、シニャック、ゴーガン、ルドンなども出品しており、印象派を発展的・批判的に乗り越えようとした彼らにより、印象派以後の絵画の潮流が形成されることとなりました。

本展では、印象派の先駆者ともいえるコロー、ミレー、クールベから、印象派における中心的な存在として活躍したモネ、ルノワール、ドガ、シスレー、さらにルドン、ゴーガンらの作品を展示いたします。

## ポイント① 印象派を中心に「フランス絵画の革新者たち」による絵画で構成

19世紀後半、フランス絵画は大きな変革をむかえ、古典的な規範にもとづくアカデミズム絵画の価値観とはことなる新たな絵画が生まれました。三章で構成する本展では、コレクションの中より、印象派の先駆者ともいえるバルビゾン派の कोरो・ミレー、リアリズム代表するクールベから、印象派の中心的存在として活躍したシスレー、モネ、ルノワール、ドガ、さらに印象派以後の絵画の潮流を形成したルドン、ゴーガンらの絵画約30点を展示いたします。

## ポイント② 新コレクション10点を初展示

近年収蔵した、ミレー1点、クールベ1点、シスレー3点、ドガ3点、ゴーガン1点、ルドン1点の絵画を本展にて初公開いたします。

このうち、《カイユ工場とグルネル河岸》（1875年）は、ゴーガン27歳の作品です。パリで株式仲買人として働き成功を収めていたゴーガンですが、名付け親の娘が画家であったことから、油彩画を学び始めるようになります。1873年に結婚して以降も、デッサンと油彩画を趣味として続けており、1876年にはサロンに出品した風景画が入選しました。描かれた風景は、蒸気ボイラーなどを製造していたセーヌ河岸の工場です。ゴーガンの自宅から10分ほどのイエナ橋近くからのと景色と考えられますが、近代を象徴する題材へのゴーガンの関心を見ることができます。ピサロを介して印象派に惹かれ、その画風を学ぶのは1877年以降のため、本作は画家として専心する以前の、ゴーガン初期の画風を知ることのできる希少な作例だといえます。

Close  
UP



ポール・ゴーガン  
《カイユ工場とグルネル河岸》  
1875年  
山王美術館蔵

## ポイント③ 「ここでしか会えない芸術作品」

山王美術館では、2009年のオープン以来、コレクションのみによる展覧会を開催してきました。本展で展示する作品の何れもが、「ここでしか会えない芸術作品」です。本展を通じて、山王美術館コレクションの新たな魅力に触れていただければ幸いです。

## 第一章

# 印象派の先駆者たち

印象派は自然主義の画家たちの子孫であり、彼らの先祖はコロー、クールベ、マネなのだ。彼らの絵画が、衝動的な筆づかいによるあの簡潔な油彩技法を用いて、時代に反抗する大まかなタッチやマッスの組み立てをおこなうのは、これら三人の巨匠から教えられたのである。

テオドール・デュレ

19世紀のフランスは目まぐるしく政治体制が入れ替わり、さらに急速な産業革命が進む中、富裕な市民階級が権力者として台頭してきます。こうした時代において、リアリズム、バルビゾン派など、従来とは異なる芸術が誕生しました。彼らはアカデミーが推進する既存の美術制度や古典的な絵画の規範・価値観を越え、自由で新しい絵画の在り方を模索していきます。その根底には、社会主義思想の広まりによる矛盾をはらんだ社会への問題意識があり、理想化された世界ではなく、あるがままの現実を主題とする芸術を目指したのです。リアリズムを代表する画家の一人がクールベです。身近な農民や労働者層を主題とした大型画面による作品をつぎつぎに発表。1855年のパリ万国博覧会に際しては「リアリズム宣言」を提唱し、サロン中心の在り方に疑義をとなえるとともに、自身の芸術と思想を世に問いました。一方、コローやミレーらバルビゾン派の画家たちは、戸外でのスケッチ、徹底した自然観察という作画姿勢により風景画の在り方そのものを大きく変革させていきました。

クールベ、コロー、ミレーらにより印象派への道が大きく拓かれ、さらなる絵画の革新が推進されることとなったのです。



Jean-François Millet

1814-1875

ジャン＝フランソワ・ミレー

1849年には、終生の地となるバルビゾンに移住し、《種をまく人》や《落ち穂拾い》などを発表。日々の労働に励む農民や、自然と共に生きる人々の姿を主題とする数々の作品を描いた。印象派のシスレーは、同時代の最も好きな画家として、ドラクロワ、コロー、クールベとともに、ミレーの名を挙げている。



【広報用画像①】

ジャン＝フランソワ・ミレー

《鶏に餌をやる女》

1851-1853年

山王美術館蔵



【広報用画像②】

ジャン＝バティスト＝カミーユ・コロー

《湖畔の大きな樹木(ヴィル・ダヴレー)》

1870年頃、山王美術館蔵

戸外での写生を積極的に行い、实景の観察を追求する一方で、画家個人の感動や感覚を重視した制作姿勢により、19世紀フランス美術の潮流である新古典主義から印象主義にいたる多様な特徴を内包すると評された。印象派の活動や試みに感心をもち、画家たちと交流を図るなかで様々な助言を与えた。特に、ピサロとシスレーは大きな感化を受けており、その影響から抜け出すのに時間を要した。

Jean-Baptiste-Camille Corot

1796-1875

ジャン＝バティスト＝カミーユ・コロー

Gustave Courbet

1819-1877

ギュスターヴ・クールベ

初展示



【広報用画像③】ギュスターヴ・クールベ《オルナン地方の滝》

1866年頃、山王美術館蔵

1855年のパリ万国博覧会時は会場近くにて個展を開催し「リアリズム」を宣言。現実を美化することなく、醜いものからも眼をそむけることなく、普通の人々が生きる同時代の身近な現実を、ありのままに描く姿勢を示した。印象派の画家たちに大きく刺激を与えたとともに、同時代の現実を主題とする点や、得意としたパレットナイフによる技法など多大な影響を与えた。

## 第二章

# 印象派の画家たち

美術の古い幹から新しい枝が出てきたのだ。

…色彩の分野において、彼らはその起源をどこにも見出せない真の発見をした。

エドモン・デュランティ

形成期の印象派の画家たちにとって、指導者的存在ともいえる画家マネ。バティニョール地区のカフェ・ゲルボワには、マネを中心に芸術家が集まり始め、そこにはモネやルノワールの姿もありました。しかしながら、彼らの新しい傾向の作品は、アカデミズムの規範から外れるとして、サロンでの入選を果たすことがむずかしい状況でした。やがて作品発表の機会もかなわず旧来のサロン審査の制度に限界を感じた画家たちにより、自らの手による展覧会が計画されるのです。

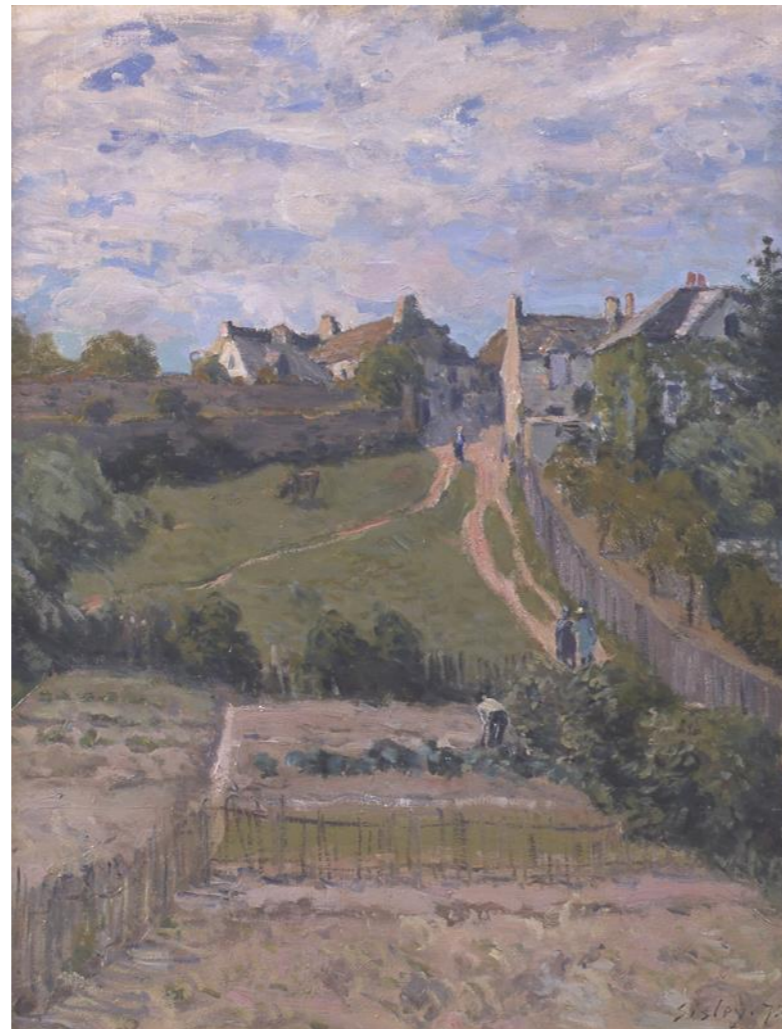
1874年4月15日、モネ、ルノワール、シスレー、ドガら30人の画家は最初のグループ展を開催。近代都市に生きる人々や同時代の風俗を主題に、「筆触分割」の技法を用いた新たな絵画表現による作品を発表していきます。外光のもとで制作することを重視した印象派の画家たちにより、西洋絵画における主題や技法上の革新がなされました。しかしながら、伝統的な絵画技法から逸脱した彼らの絵画はあまりにも革新的、前衛的すぎると、多くの批評家や観衆から攻撃的に批判・酷評されました。アカデミズムがいまだ主流であった当時の美術界においては、筆触を残した技法は「未完成」「下描き」と見なされたのです。



## Alfred Sisley 1839-1899

アルフレッド・シスレー

1862年にグレールの画塾に入り、モネ、ルノワールとともにフォンテーヌブローの森をはじめとするパリ近郊で戸外制作に取り組む。印象派展には1874年の第一回展をふくめ、1876年、77年、82年の計4回参加。その一方で、サロンへの出品も続けた。長く不安定な生活に苦しめられ、ようやくその真価が認められたのは晩年であった。



【広報用画像④】アルフレッド・シスレー《登り道》1875年  
山王美術館蔵

## Claude Monet 1840-1926

クロード・モネ

幼少期から青年時代までを過した港町ル・アーヴルにて海景画家ブーダンに出会い、戸外での自然に基づく制作を勧められる。1859年にパリに出てアカデミー・シュイスに学びピサロと出会う。兵役の後、アカデミーの画家グレールの画塾に入り、ルノワール、シスレーらと出会う。1869年、写生に訪れたラ・グールヌイエールにて、ルノワールとともに筆触分割を見いだす。1874年に最初のグループ展を開催。モネの出品作《印象、日の出》から「印象派」と呼称されるようになる。以降、76年、77年、79年、82年の計5回にわたって印象派展に参加。晩年にいたるまで印象主義的技法を追求しつづけた。

【広報用画像⑥】クロード・モネ  
《オシュデ家の四人の子どもたち(ジャック、シュザンヌ、ブランシュ、ジェルメーヌ)》  
1880年代初頭、山王美術館蔵



【広報用画像⑤】  
アルフレッド・シスレー  
《サン＝メメスのマロニエの木》  
1880年  
山王美術館蔵







【広報用画像⑦】  
ピエール＝オーギュスト・ルノワール《若い女性》1877年  
山王美術館蔵

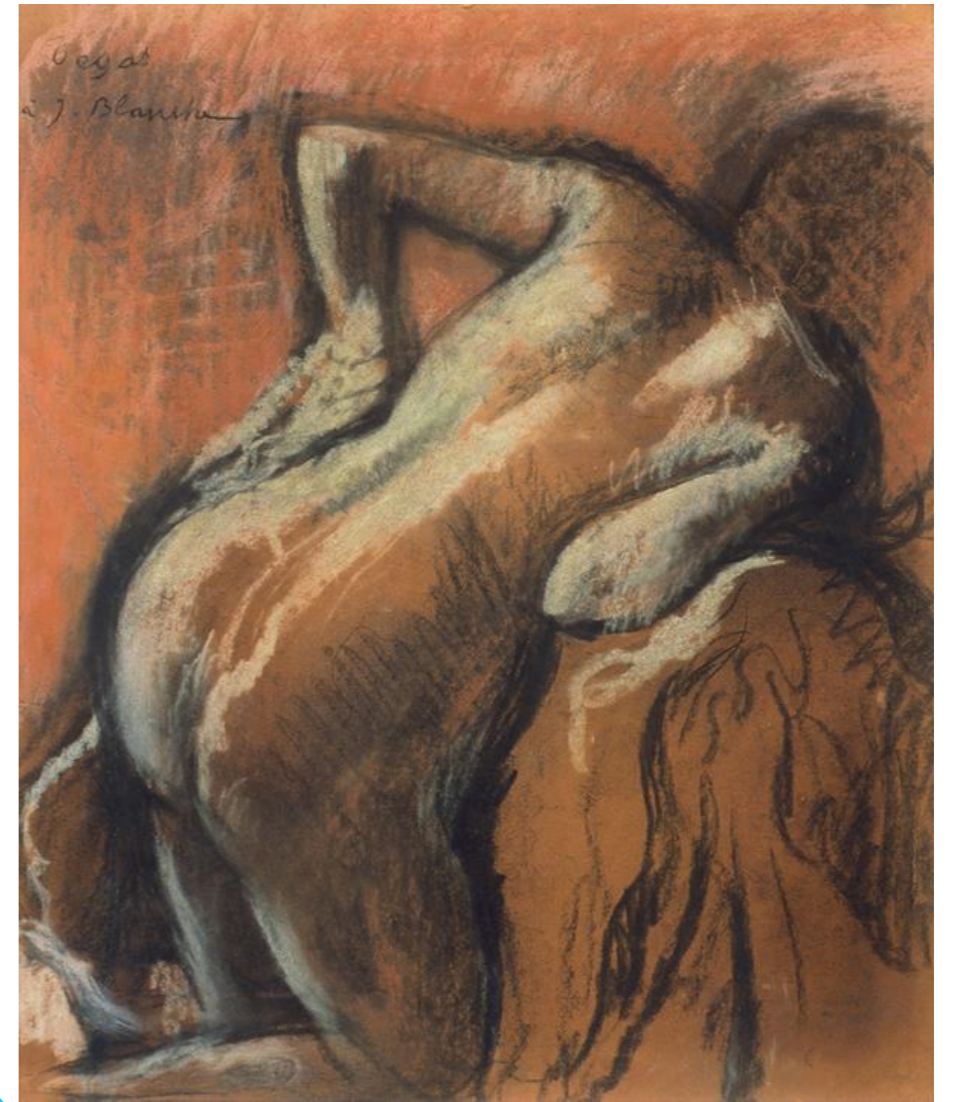
## Pierre-Auguste Renoir 1841-1919

ピエール＝オーギュスト・ルノワール

13歳で陶器絵師の見習いとなる。1861年よりグレールの画塾で指導を受け、そのかわり1862年にはエコール・デ・ボザール(国立美術学校)に入学する。グレールの画塾ではモネ、シスレーらと交友を深める。ピサロの提案に基づき、1873年に設立した芸術家による株式会社では管理者となり、第一回印象派展では展覧会の構成を担当。1874年以来、76年、77年、82年の計4回出品している。印象派展に参加するかたわらサロンにも断続的に出品し、1879年のサロンでの成功を契機に肖像画家としても成功を収める。肖像画、近代パリの生活情景、風景画、静物画から裸婦像と幅広い主題を描いた。



【広報用画像⑧】ピエール＝オーギュスト・ルノワール  
《読書(赤とローズのブラウスを着た二人の女性)》1918年  
山王美術館蔵



初展示

【広報用画像⑨】エドガー・ドガ《入浴のあと》1892年頃、山王美術館蔵

## Edgar Degas 1834-1917

エドガー・ドガ

1855年にエコール・デ・ボザール(国立美術学校)に入学。当初は古典主義を継承する歴史画家を目指していたが、1862年からはマネとも親しく交流し、現代生活を主題とするよう助言を受ける。また、マネを介してモネやルノワールとも知己を得る。1874年から始まった印象派展にも積極的に参加。計8回の印象派展のうち、1882年をのぞくすべての展覧会に出品している。技法的にも印象主義とは距離を置き、構図や線描を探究。同時代の都市生活への関心から、競馬、踊り子などを主題とする多くの作品を描いた。



### 第三章

## 印象派をこえて

ドラクロワ以来フランスが経験したもっとも偉大な絵画運動である。…われわれが印象主義のなかに見るものは、フランスでしか構想できなかった種類の絵画であり…。印象主義はわれわれにほとんど予期しない再生(ルネサンス)をもたらした。

カミーユ・モークレール

印象派のグループによる展覧会は、1874年から1886年にかけて、計8回にわたって開催されました。彼らは非難や嘲笑を受けながらも自らの絵画表現を探究していきますが、やがてグループの中心的存在であったルノワールやモネらが印象派から距離をおくようになり、1878年以降には経済的な理由もありサロンへと復帰します。さらに、グループ内の対立も目立ちはじめ、グループ展としての存在意義も薄れていきました。最後となった第八回展には、もはやルノワールやモネらは参加しておらず、その一方でスーラ、シニャック、ルドン、ゴーガンらが出品しています。印象主義の技法を科学的に徹底し点描技法へと発展させたスーラやシニャック。印象主義への批判的姿勢から総合主義を確立したゴーガン、象徴主義へといたったルドン。のちにポスト印象派と称される彼らは、印象主義を継承しつつも発展的または批判的に乗り越えようと試みたのです。

印象派の画家たちによる絵画の革新は、より新たな探求を生み出しました。彼らにより開かれた絵画表現への扉により、フォーヴィスム、キュビスム、さらにエコール・ド・パリと、さまざまな主義や美学のもと、20世紀以降のフランス絵画は実り豊かに展開していくこととなったのです。



## オディロン・ルドン Odilon Redon

1840-1916

1864年パリの国立美術学校に学ぶがアカデミックな教育に反発し、失意のもとボルドーにもどる。その後間もなくエッチングの制作をはじめ、1879年と1883年に石版画集を刊行。1886年には、ギョーマンの紹介により最後の印象派展に参加。戸外制作における印象派の技法を認める一方で、その表現方法に限界を感じ反発。幻想性や神秘性に題材をもとめた独自の世界を展開し、象徴主義を代表する画家として認識されるようになる。



【広報用画像⑩】オディロン・ルドン《アポロンの二輪車と大蛇》1905年、山王美術館蔵



初展示

【広報用画像⑪】ポール・ゴーガン《カイユ工場とグルネル河岸》1875年、山王美術館蔵

## ポール・ゴーガン Paul Gauguin

1848-1903

趣味として絵を描くようになり、1876年にサロン入選。その後、印象派の作品に魅了され、ピサロ、モネ、セザンヌらの絵画を収集。ピサロとの交流を通じて印象派を学び、ピサロの影響下で印象派風な絵画を描く。ピサロ、ドガの勧めにより第4回印象派展に出品。以降、80年、81年、82年、86年の計5回参加している。1883年には絵画の道へ専念することを決意。1886年、芸術家が多く集うブルターニュ地方のポン＝タヴェンをはじめて訪れ、やがて視覚を重視する印象主義の絵画表現に疑問を抱き始める。同地に再滞在した1888年には、モチーフを単純化し、黒く太い輪郭線と鮮やかな色面を強調したクロワゾニスムの技法を確立、総合主義を提唱した。



## 展覧会概要

- 展覧会名 開館15周年記念展  
山王美術館コレクションでつづる  
印象派展
- 会期 2024年3月1日（金）-7月29日（月）
- 休館日 火曜日・水曜日（ただし、3月20日は開館）
- 開館時間 10時～17時（入館は16時30分）
- 会場 山王美術館  
  
〒540-0001  
大阪府大阪市中央区城見2丁目2番27号  
TEL 06-6942-1117  
H P <https://www.hotelmonterey.co.jp/sannomuseum/>
- 入館料 一般 1,300円  
大学・高校生 800円  
中学生以下 500円（保護者同伴に限り2名様まで無料）  
\*学生証をご提示ください。

## 広報画像に関するご案内

このプレスリリースに掲載されている広報用画像①～⑪につきましては、画像データをプレス掲載用にご用意しております。また、読者プレゼント用招待券もご提供しております。

「広報用画像使用申込書」に必要事項をご記入の上、FAXまたはe-mailにてご連絡くださいませ。

### [お問合せ先]

山王美術館  
亀井 里香（かめい りか）

TEL 06-6942-1117

FAX 06-6942-8700

E-mail

r-kamei@hotelmonterey.co.jp